

パリの残雪

田付たつ子





パリの残雪

¥ 130

昭和32年12月25日 第1刷発行

©

著者 田付 たつ子

発行者 野間 省一

印刷所 豊国印刷株式会社

発行所 株式会社 大日本雄弁会講談社

東京都文京区音羽町3ノ19

振替 東京 3930

電話 大塚(94)3101・3111・3121

(落丁本・乱丁本はおとりかえいたします)

(横田製本)

ミリオン・ブックス総目録

☆ 文学创作

中村真一郎 感情旅行 卷三

佐藤春夫 曼陀羅 辛酉
佐藤春夫 悲壯美の世界 辛酉

中野重治むらぎも 卒四
椎名麟三 遯
近 卒四

畔柳二美姉
 妹
 琴三
 梅崎春生砂
 時
 計
 琴三

椎名麟三 自由の彼方で 辛巳
大田洋子 夕風の街と人と 辛巳

阿部知二人工庭園 翠言 畔柳二美限りなき困惑 翠言

石川達三 悪の愉しさ 辛三
堀田善衛 夜の森 辛三

石川 淳鷹・珊瑚 三三 由起しげ子 語らざる人 三三

丹羽文雄蛇と鳩 草子
丹羽文雄告白 白草子

大田 洋子 半人 間 華言 井上 靖 異域の人 華言

川崎長太郎
抹香町
芋三
遠藤周
作
目い人・黄色い八
芋三

坂口安吾二流の人
石川淳新釈雨月物語

石反羊次郎 母の自画像(上下) 上巻 神西清少年 全三巻

石坂洋次郎 母の自画像(上下)
下上 三三

下上
辛辛
二五

神西清少年

壺井 栄 補 襤 (うちかけ) 辛三

デュアメル 田付・高橋共訳 希望号の人々 辛三

ケッセル 田辺貞之助訳 赤い草原 辛三

ラクテル 平岡・河内共訳 孤独な女 辛三

ワシレフスカヤ 原卓也訳 夜明け(上・下) 各辛三

西野辰吉 秩父困民党 辛三

福永武彦 冥府・深淵 辛三

佐藤春夫 日照雨 辛三

中村真一郎 冷たい天使 辛三

ラフォレット 高橋正武訳 ナダ(何でもないの) 辛三

パノーヴア 工藤精一郎訳 四季(上・下) 各辛三

窪田 精 ある党員の告白 辛三

沢野久雄 夜の河 辛三

畔柳二美 こぶしの花の咲くころ 辛三

R・カウフマン 三浦・曾野訳 天国は配当を払わない(上・下) 各辛三

芝木好子 洲崎パラダイス 辛三

川端康成 山の音 辛三

エルザ・トリオレ 菊地章一訳 誰も私を愛さない 辛三

ビニール・ガスカル 室淳介訳 女たち 辛三

ジャン・ジャック ルソー 青柳瑞穂訳 孤独な散歩者の夢想 辛三

北畠八穂 またなきいまを 辛三

ニ崎コ一訳 放たれた雄獅子たち 辛三

川崎長太郎 浮草 辛三

村松梢風 銀の耳飾 辛三

加藤周一 運命 辛三

J・ロワ 大塚幸男訳 不貞の妻 辛三

高村 勝治訳 ヘミングウェイ傑作選 一〇

小島 直記訳 サントリークジニベリ 青春の手紙 二〇

井伏 鱒二 漂民字三郎 二〇

外村 繁 筏 二〇

☆ 隨筆教養

高橋 義孝 隨筆 合切袋 二〇

N・H・K・編 言葉の魔術 二〇

小倉 武志 撮影所 二〇

長谷川 春子 大ぶろしき 二〇

内田 亨 動物隨筆 猫の裁判 二〇

高橋 義孝 狸の念仏 二〇

金 素雲 アジアの四等船室 二〇

阿部 知二 夜明けに進む女性 二〇

平井 昌夫 上手な話しかた 二〇

ラル テギ 大塚 幸男訳 戦争と世界の青春 二〇

モン タン 渡辺 淳訳 頭にいっぱい太陽を 二〇

森田 たま 森田 たま ふるさとの味 二〇

片岡 美智 私もまた？ 一悩める妻へ 二〇

尾崎士郎 醉中一家言

辛三

ウオルター・ロード
佐藤亮一訳

大西洋の悲劇
「タイタニック号」の謎―

辛三

田付たつ子 パリノ聲
(いしだたみ)

辛三

N・H・K 編 ことばの生い立ち

辛三

串田孫一 表現の悦び

辛三

小島政二郎 随筆金曜日生れ

辛三

中村武志 うちの女房

辛三

田付たつ子 パリの雀(モアノ)

辛三

佐藤みどり 女の眼

辛三

内田 亨 随筆象牙の河馬

辛三

中村武志 目白三平のあけくれ

辛三

森田たまきものおぼえ書

辛三

村上信彦 流行
―古さとあたらしさ―

辛三

田付たつ子 パリの俄雨(ジブレ)

辛三

湯浅 明 遺伝―カエルの子は

辛二

太田黒克彦 随筆水の泡
―野鳥魚溪―

辛二

大後美保 天気ノイローゼ

辛二

平井昌夫 魅力のある会話

辛二

平井昌夫 効果的な話しかた

辛二

高橋義孝 随筆ひとり相撲

辛二

田付たつ子 パリの残雪

辛三

学芸評論

川達三 不安の倫理 辛三

返肇 五十人の作家 辛三

・S・ニイル
田静志訳 問題の子供 辛三

三島由紀夫 小説家の休暇 辛三

増田 渉 魯迅の印象 辛三

加藤周一 雑種文化——日本の小さな希望—— 辛三

三浦つとむ 日本語はどう言語か 辛三

中村光夫 中村光夫作家論集(I) 辛三

中村光夫 中村光夫作家論集(II) 辛三

中村光夫 中村光夫作家論集(III) 辛三

マルソオ
小島直記訳 ある愛欲の生涯
——ドンジュアンと
カザノヴァ—— 辛三

インフェルト
武谷・篠原訳 物理学の革命 辛三

本田秋五 「白樺」派の文学 辛三

三浦つとむ 弁証法はどういう科学か 辛三

村多宏雄 異常社会 辛三

秋山英夫 Oの文学——新リケ論—— 辛三

小田切秀雄 文学入門 辛三

ヴァン・デル・メル
大塚幸男訳 自由なき女たち 辛三

森有 正 バビロンの流れのはとりにて 辛三

浅田光輝 共產主義 辛三

山本健吉 古典と現代文学 辛三

福田恆存 戦争と平和と 辛三

中野重治 事実と解釈 辛三

M・ペーグ
渡辺淳訳 アンドレ・ジッド 辛三

加藤秀俊 マス・コミュニケーション 辛三

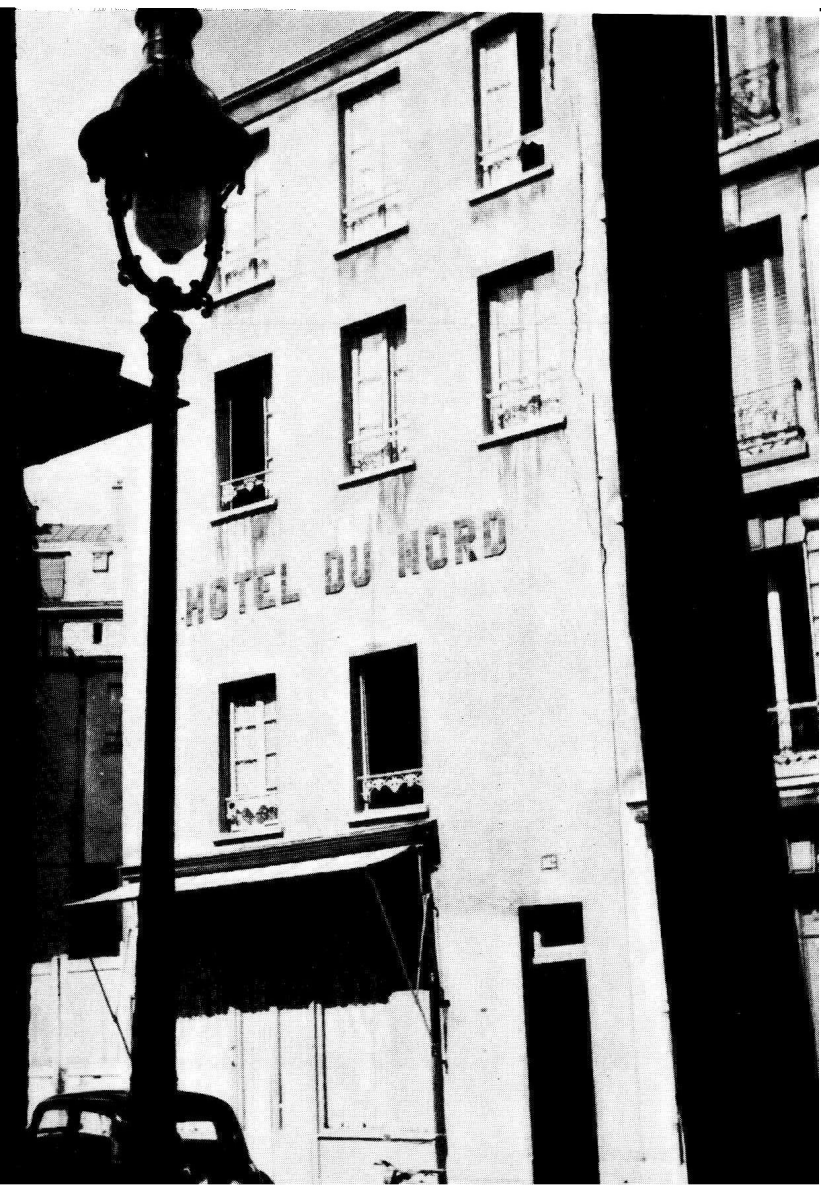
絵を 画く 人 (モンマルトル通り)



写真提供

高橋邦太郎

北ホテル（サン・マルタン運河前）



パリの残雪

田付たつ子



ミリオン・ブックス

装幀 田付清子

田付たつ子さんを悼む

吉 田 茂

たつ子さんの亡くなったお父さま、ブラジル大使の田付七太氏は、霞ヶ関での古い仲間だった。下手な長唄を聴かされたりして、くだけた楽しいお付合をしたことも、いまは遠い想い出となった。

その田付さんに、たつ子さんのような優れたお嬢さんがあることを、私は少しも知らなかった。私の在野生活が永かったからである。たつ子さんが素晴らしいフランス語の達人であることが知ったのは戦後、再び私が霞ヶ関に関係するようになってからであった。

たつ子さんのフランス語は本ものだった。私の総理大臣在任中の外遊に、随員として通訳を引受けて頂いたのだが、その流暢さは当のフランス人からもほめられた。外交上不可欠の言葉の問題が首尾よく果されたことは、まことに喜ぶべきことであった。

語学がよくできることは、頭脳のよさを証明している。実際、田付さんは頭のいい人だった。頭がいいから、話していても、話題がつきなかった。次から次へと話はずんで思わすひ

き入れられてしまうのだ。最近はお父さまに代って、たつ子さんが私のよい話し相手になっていた。おもえば親子二代のお付合といえる。

たつ子さんの著書『パリの甕』を愛読して、私も感心した一人である。田付さんは弁舌にもまして、筆の立つ人であることを知った。凡そ日本人の書いた多くの外国事情紹介ものは、外国をけなして己を偉がる風潮に偏しやすいのであるが、田付さんの観たフランスの採点は、よく当を得たものだと思う。簡潔な文章の中に、上手に皮肉を混じえたあたりはあのさっぱりした田付さんの気性なればこそ、綴り得たのであろう。

日本人は、どうも男より女の方が偉いようである。私の周囲にも、これだと思う人物には婦人が多い。だが、あの暗い戦争時代が長かったので、そうした婦人たちの才能が、社会の野蛮性にかくれて、発見されなかったようだ。もっとも若い人は戦争のためよい教育をうける機会を逸したので、才能を磨かれることなくまことに気の毒なことである。

田付さんはいつまでも張のある若々しい人だった。松方コレクション返還については、まことにお手柄であった。生れついでの外発的感覚と、巧みな語学力をもって、はじめてなすことができたのである。パリ市では日仏文化に貢献した田付さんの功勞を謝して、名誉市民の称号を授与した。幼稚園の頃から、青年期までパリに親しんだ田付さんとしてはこの上ない喜ばしいことであった。

田付さんは九月十八日ついにこの世の人でなくなった。もうあの流暢なフランス語を再び耳にすることはないのだ。日本の外務省もあのようなベテランを失った損失は大きい。

私はもう永らく他人の婚礼と、葬式には参列しないことにしている。婚礼にいかないのは、殆んどの場合、お嫁さんの方が立派でお婿さんが見すばらしく見える。それは男としては辛いことである。葬式は、いうまでもなく、識った人に先立たれるのは、いい氣持がしないからである。この度私は田付さんの葬式の友人總代を引受けてしまった。私としては大変な努力である。もう少し長く生きていてもらいたかった私個人の氣持と、努力の賜であった田付さんの一生への同情が私に禁を破らせたのである。

目次

田付たつ子さんを悼む

吉田 茂

1 脱皮しましょう

プロローグ……………	一六
礼儀またはプロトコル……………	二六
食事をもてなすことについて……………	三六
年を忘れさせる心遣い……………	四三
聖誕祭の頃のデリカテス……………	五八
日常生活を愉快に……………	四七